

小野 あずさ

Cuttin' It 1

5月12日に、蜷川幸雄様の訃報を受けて、言葉を失いました。勝柴様、原田様、服部様をはじめ、偉大な照明家の皆様、尊敬する照明チームの皆様に巡り合わせてくださったのも、蜷川様のお陰です。ご生前のご厚情に深く感謝するとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

5月号のエッセイで、プレゼンテーションについて触れた時に記載させていただいた写真は、「Cuttin' It」という公演の舞台美術のスケッチでした。今月、この公演の照明デザイナーとして、関わらせていただいております。

ロンドン、ウォータールーにあるヤング・ヴィックという劇場で幕を開け、その後7月末までの2カ月間、ナショナルツアーをします。この劇場名の「ヤング」は、若い世代の演出家、脚本家、その他アーティストが、世界から来るアーティストとコラボレーションできる場、つまり、Open for young peopleという意味が込められています。この劇場は、政治、文化、移民、宗教、人種等、現代のさまざまな情勢や身の回りで起きている問題を取り上げた、新しい脚本と斬新な作品を多く手がけることで、オフ・ウエストエンドでは有名です。前から、よく公演を観に来ていた劇場だったので、今回のお話をいただいた時、とても胸が高鳴りました 。



Young Vic 劇場

この「Cuttin' It」という演目は、長年、アフリカの女性人権問題として世界で論議されてきたFGM（Female Genital Mutilation 女性性器切除）についてのお話です。イギリスの法律では、これを禁止していますが、ソマリアやケニアなどアフリカからイギリスに移住してきて、この風習／儀式をイギリスでも続けている人たちが、まだたくさんいるそうです。ロンドンに住む人々は、この公演を目にした時、FGM という恐ろしい儀式がロンドン内（ヨーロッパ内）で、しかも、隣の家で行われているかもしれないという事実を実感するのです。

この演目は、ソマリアで生まれた2人の15歳の少女のお話で、1人は生後間もなくロンドンに来て育ち、もう1人はソマリアで内戦を体験しながら育ち、10歳になってからロンドンに移住してきました。同じ高校に通う2人は、お互いに話したことはなく、ただ互いにソマリア出身ということだけ知っていました。性格も考え方も話し方も、全く異なった2人の少女の世界が、舞台上でパラレルに展開していきます。



ムナとイクラのパラレル世界

舞台美術は、コンクリートに見せた階段と踊り場、そしてロンドンの学校でよく目にする、校庭を囲むフェンス（このセットでは赤）と蛍光灯が、階段をミラーするように、天井を這っています。一見、普通の階段は、真ん中で、バッサリと切り離されたことにより、実用性を失う。FGMを比喩した、この抽象的なセットの中で、ロンドン南（アフリカ系移民が多い地域）の風景、学校、古いアパート、2階建バスの中の場面が展開されます。

2人とも、タイムスケール上、同じ時間を生きているのですが、前半は2人とも違う場所にいるという設定（例：1人は教室の中で、もう1人は授業をサボって校舎の外）。セリフは、実際に言っていることと、思っていること、やっていることをすべて口に出すという、小説をそのまま読んでいるようなダイアログなので、観客としては、感情移入と言うよりも、今どこにいて、彼女が何を思っているのかが分かりやすい。セットが抽象的なので、音楽家と照明家にとっては、ナチュラリズムでいくか否かが迫られました。結果、前半はできるだけナチュラリズムでいき、後半、2人の世界が交差し始めるあたりでアブストラクトにいくことで一致しました。

2人のダイアログは、交互に素早く切り変わるので、1人が会話をしている時は、もう1人の世界は少し光量を落とすが、光は空間に残しておく。そうすることで、2つの世界の温度差を保ち、コントラストをつける（ねらい）。狭い舞台で、ハレーションは避けられないので、1人が話している間、もう1人のトランジッション／転換は隠さず、見せる。

とても重くて、深刻な題材。でもクライマックスまで明るく淡々と持っていき、最後にどん底へ突き落とす、という演出です。「この演目は、美術、音響、照明、舞台監督、役者みんな、女性チームで行く！」と決めたナイジェリアン演出家ボーラハン・オビセサン（男性）。FGMという、重大な課題を、効果的に、正確に、世に伝えなければいけない責任を、ひしひしと肩に感じながら、心と目に焼き付く場面を作ることに、日々格闘しています。